研　究　紀　要

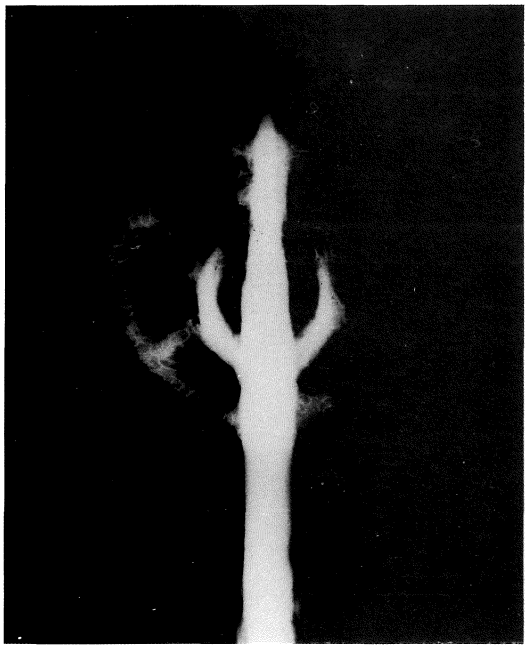
第 8 号

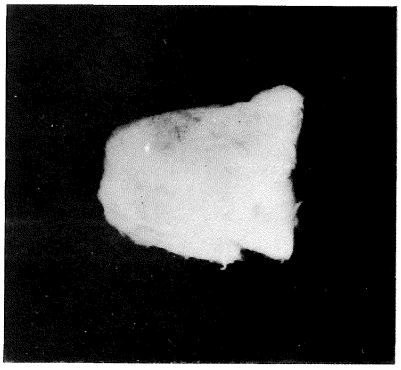
1 9 9 1

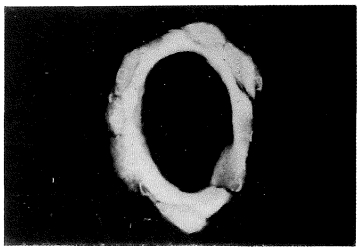
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

巻頭図版

（瀧瀬論文付図）







熊谷市三ヶ尻林４号墳出土銀象嵌装大刀

上　出土状況　　下　Ｘ線写真（左 鐔　右上 鞘尻金具　右下 柄頭縁金具）

目　　次

序

方形周溝墓観察の一視点（１）
大屋　道則……1

溝中土壙小考
福田　　聖……9

関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ
（古墳出現前夜の様相）　村田　健二……37

関東地方における埴輪祭式の受容
山本　　靖……65

埼玉県の拵付大刀
瀧瀬　芳之……101

「鬼高式土器」の外部
―古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討―
利根川章彦……127

古代武蔵の土師器理解のために
―北武蔵の７・８世紀の様相―　赤熊　浩一……165

埼玉県の拵付大刀

瀧　瀬　芳　之

1．はじめに
2．県内出土の拵付大刀の概要
3．出土古墳の概要
4．まとめ

1．はじめに

埼玉県にはおよそ4,500基の古墳が存在するが、飾り大刀と呼ばれる大刀の出土はさほど多くはない。とくに環頭大刀などは、県内で3例しか確認されておらず、隣県の群馬県や千葉県などと比べると見劣りがすることは否めない事実といえよう。

飾り大刀は古墳時代後期を代表する遺物の一つである。その東国における展開は、畿内政権による地方支配を反映するものとして位置づけられており（町田1976）、これらの大刀を佩用するものは、その地域の軍事組織の頂点を占めた、地方豪族あるいは上層農民層に求められるという見解がある（新納1983a）。

こうしたことを考えると、埼玉県における状況は、単に古墳の総数や主体部の調査例が少ないことにのみ帰するものではなく、東国古墳文化の地域性の一面としてとらえるべき問題と思われる。

また、県内に限らず、古墳時代後期の古墳から出土する大刀はその多くが、鉄刀という形で発見されており、金属製の装具としてはせいぜい鉄製の鐔がみられるにすぎない。これらの大刀は、当時は木の柄や鞘のままで使用されていた可能性が強いと見るべきであるが、これらを実戦用の武器とし、きらびやかな飾り大刀を軍事権力のシンボルとしてとらえるならば、その中間的な存在である、柄頭や鞘尻などに鉄製の装具をもつ大刀は、いったいどのような性格をもつものなのだろうか。

金銀銅を用いない装飾性の乏しい外装をもつ大刀群は、大刀研究のなかではあまり注目されていなかったが、その歴史的な価値は、飾り大刀と比較してもけっして少なくはないと考える。そこで、今回のこの小稿では、飾り大刀を含めた「拵付大刀」という言葉を用い、以上の留意点をふまえながら、埼玉県内の大刀の資料を紹介し、検討を加えてみようと思う。

2．県内出土の拵付大刀の概要

【1】 環頭大刀

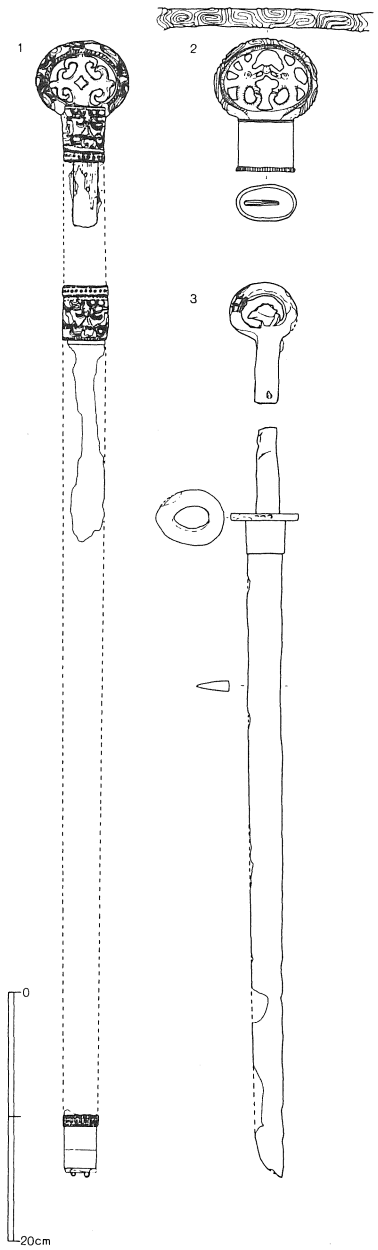
環頭大刀には、行田市将軍山古墳出土変形三葉環頭大刀（第1図―1、第5図―1）、東松山市柏崎？出土双龍環頭大刀柄頭（第1図―2、第5図―2）、皆野町稲荷塚古墳出土単鳳環頭大刀（第1図―3）の3例がある。

将軍山古墳例は、通常の三葉環頭大刀にみられるパルメット文が、3単位で構成された特異な例である。環内の三葉文は金銅製で、環体及び柄縁と鞘口の筒金は、銅地に金の金貝（薄様）を巻いて龍文を打ち出したものである。筒金の縁にはこれも銅地金貝の帯状責金物をあてる。鞘尻金具は地金は銅であるが、上半分のみに銀を張る非常にこった造りであり、底には鹿角？をあて、2本の蟹目釘で留めている。この環頭大刀は、町田章氏によって6世紀型Ⅰa4式環刀と分類され、その実年代は6世紀中葉と考えられている(町田1976)。穴沢咏光・馬目順一両氏の編年では第7期に属し、第6期～第7期に525～550年の実年代が与えられている(穴沢・馬目1975)。

また、将軍山古墳にはこの他にも銀線巻の柄や捩り環頭柄頭の破片が出土しており、金銅製と水晶製の三輪玉も存在することから、奈良県藤ノ木古墳で発見されたような、捩り環頭がつき勾金をもつ飾り大刀が存在していた可能性がある。

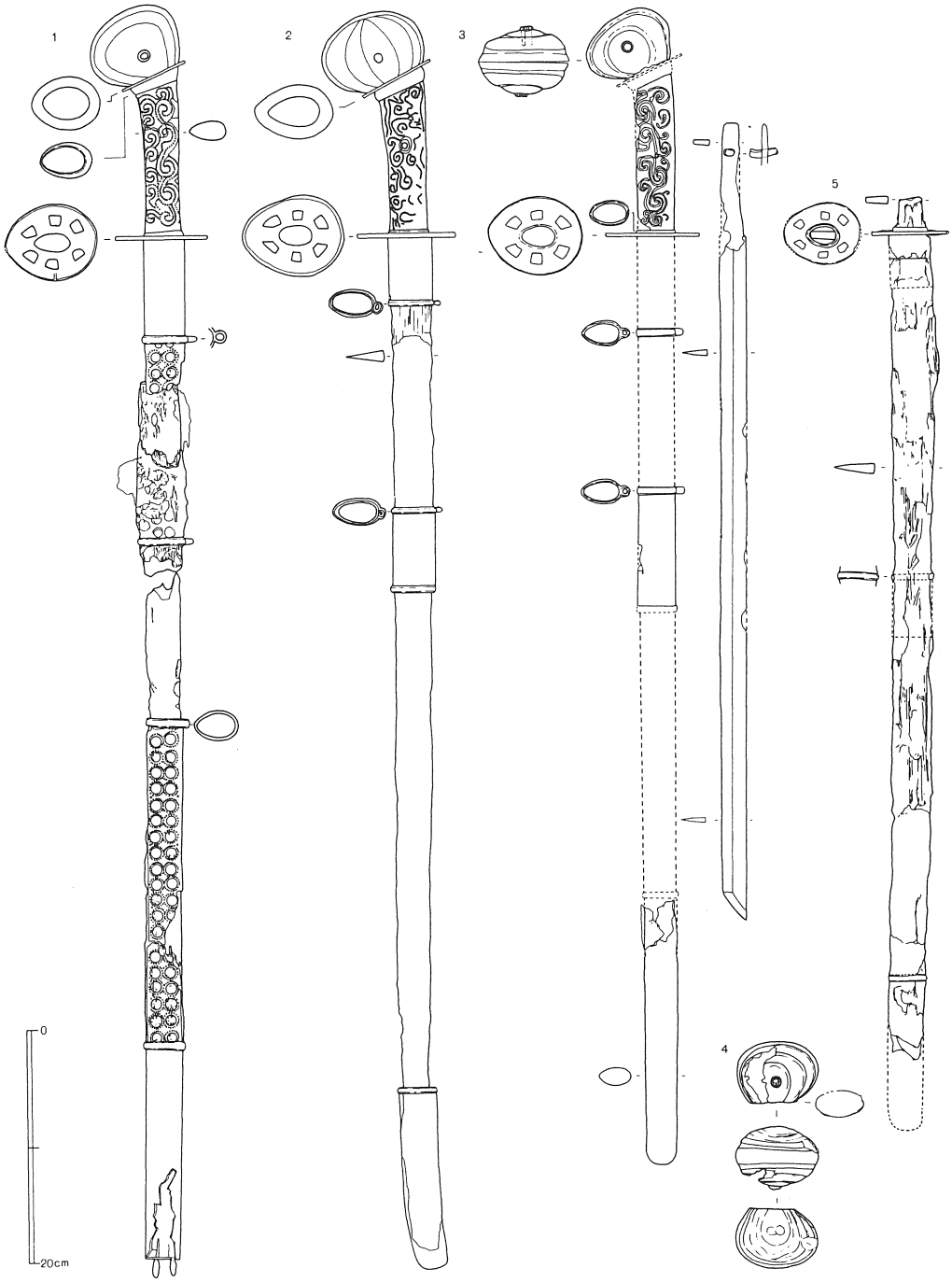
柏崎出土例は、穴沢咏光氏の御教示をうけたもので、個人蔵の資料である。箱書きには「埼玉県南埼玉郡柏崎」とあるが、当所は現在の岩槻市柏崎にあたり、周辺には古墳の存在が知られていない。おそらく、古墳の分布等から考えて比企郡柏崎、現在の東松山市柏崎のことと考えられる。環内の双龍は板状で、左と右とでは角の数が異なる。環体には渦状となった文様を施している。柄縁の筒金の両縁には刻み目をもつ責金物（共造り？）をもつ。金銅製。本例は、新納泉氏による双龍環頭大刀の編年ではおよそⅣ式に相当すると考えられ、その実年代は580年が中心とされている（新納1983b・1987)。

稲荷塚古墳例は、銀象嵌が施された単鳳環頭大刀である。象嵌は柄頭・鎺（はばき）・鐔に認められ、柄頭環体の一部には象嵌の剝離した痕跡が肉眼で観察できる。全体の文様は



1 将軍山古墳出土
2 柏崎出土
3 稲荷塚古墳出土

第1図　埼玉県の拵付大刀(1) 環頭大刀



1・2 小見真観寺古墳出土　　4 蛤塚古墳出土
3　三千塚古墳出土　　5 西台 9 号墳出土

第 2 図　埼玉県の拵付大刀(2) 頭椎大刀

不明であるが、S字状の文様が確認される。鋒には連続渦状文が、鐔には連続蕨手文が施されている。本例は柄頭と刀身が別造りで鐔が存在することや、象嵌の文様などから、鉄製の単鳳環頭大刀のなかでは新しい形式と考えられる。その年代はおそらく6世紀末頃に求められるであろう。

【2】 頭椎大刀

頭椎大刀は、9遺跡（不詳を含む）から10振出土しており、県内ではもっとも多くみられる拵付大刀である。行田市小見真観寺古墳からは2振の金銅装頭椎大刀が出土している（第2図―1・2）。1は柄頭が横畦目で、六窓鐔をもつ。柄・鞘ともに金銅板で包み、柄間表裏と鞘佩裏には蕨手文を、鞘佩表には連続円文を施すという、金銅装としては通例の拵をもつ。鞘尻には蟹目釘を打ち込んでいる。2は縦畦目の柄頭と六窓鐔をもち、柄は金銅板巻ではあるが、鞘の足間・責間には装飾金銅板を施さない。鞘尻は丸尻である。

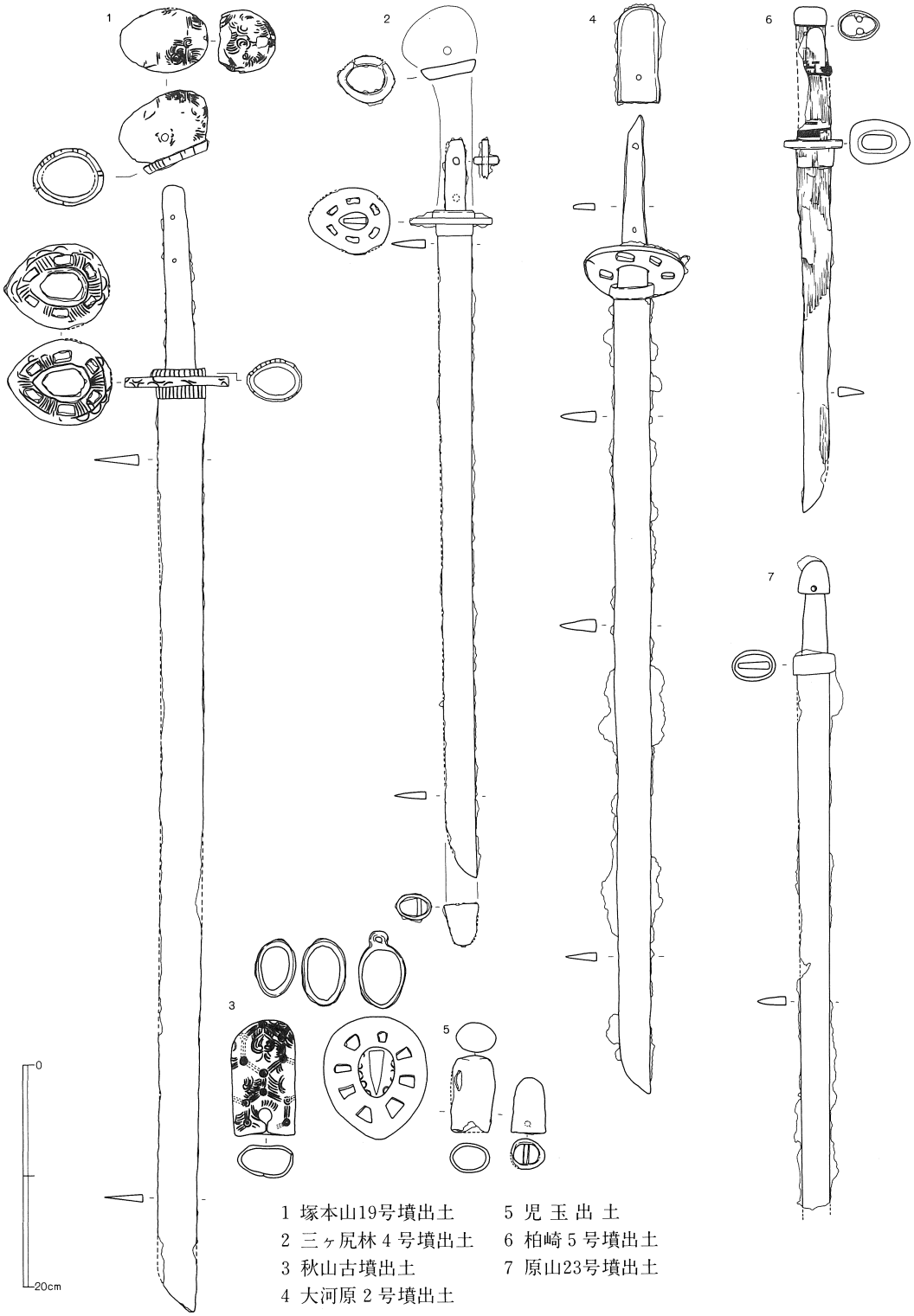
東松山市三千塚古墳群出土例（第2図―3）は拵の全てが残っている資料ではないが、おそらく2と同様の鞘をもった頭椎大刀と考えられる。なお、刀身は研ぎ出してあり、光沢を放っている。

第2図―4は川本町蛤塚古墳出土の金銅製頭椎柄頭である。横畦目で、鴟目が佩表に残存している。またこの他に、深谷市木の本古墳群から1振、美里町生野山古墳群から1振、それぞれ金銅装頭椎大刀が出土したといわれるが、その詳細は不明で、遺物も確認されていない。ただし、後者に関しては、『埼玉県史』第1巻（1951年発行）に写真（第79図）が掲載されている「東児玉村大字十条中山古墳」出土のものがこれにあたると思われる（本文中では「環頭太刀」とある）。柄間には新聞紙が巻いてあるため拵は不明だが、縦畦目の柄頭・六窓鐔をもち、鞘には鞘口金具・鞘中金具・丸尻長銅の鞘尻金具・足金物・責金物などほぼ完全な拵が残存している。おそらく金銅装で、小見真観寺古墳例（第2図―2）と同様の拵をもつものと考えられる。

これら金銅装の頭椎大刀は、おおよそ6世紀末から7世紀前葉にかけての所産と考えられるが、そのなかでも横畦目で蟹目釘をもつ小見真観寺古墳例（第2図―1）はわずかに古く位置づけることができる。

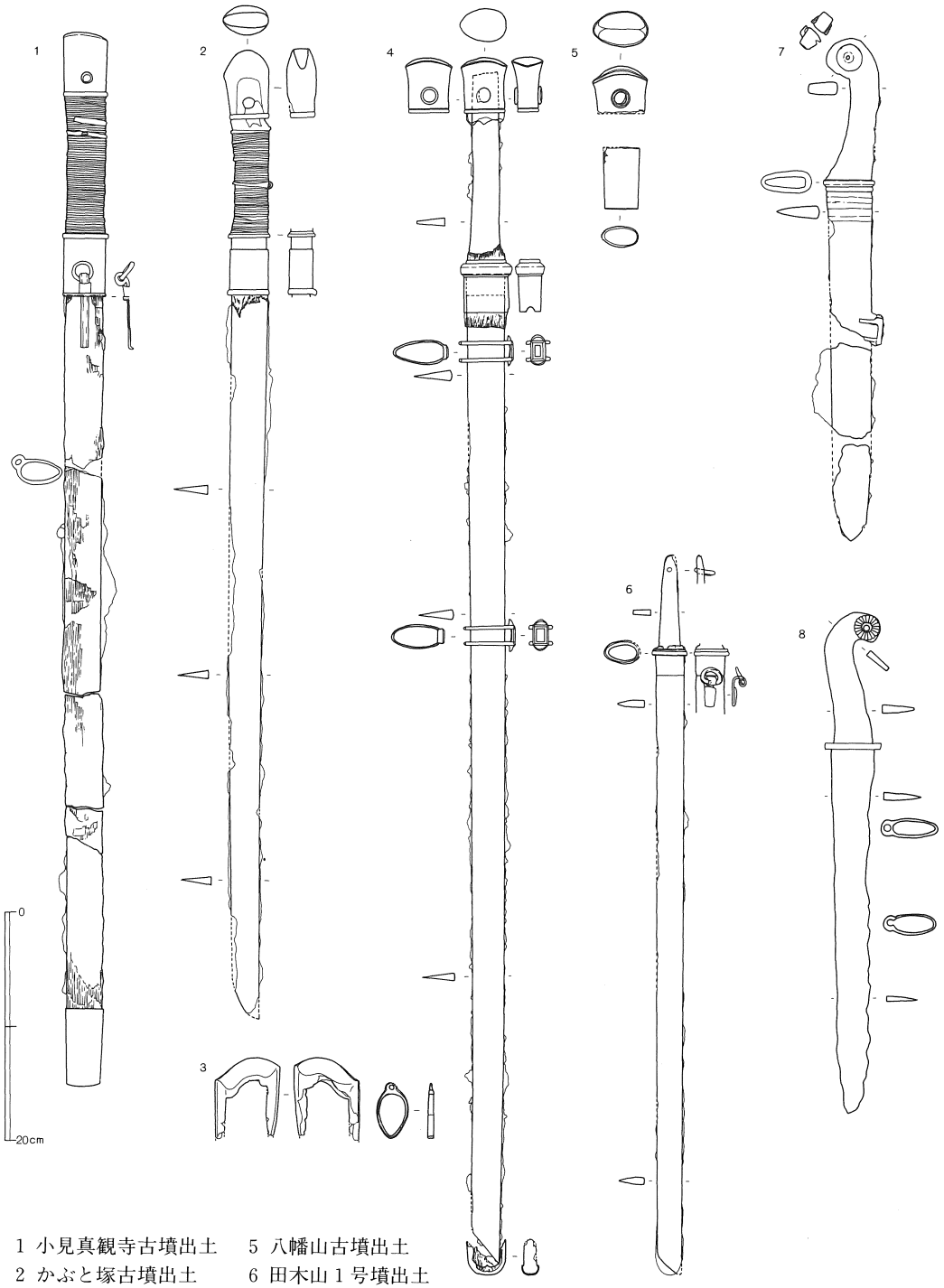
美里町塚本山19号墳出土例（第3図―1、第5図―3）は銀象嵌の施された鉄装頭椎大刀である。柄頭には亀甲繋文が、柄頭の縁金具・鐔・柄元金具・鋒には直線を主体とした文様が施されている。銀象嵌の頭椎大刀は、全国でも十数例ほどしか確認されていない。なかでも本例のように、柄頭以外の拵が判明しているものは、兵庫県龍野市中井2号墳（渡辺 他1987）および岡山県津山市柳谷古墳（保田 他1988）で出土しているにすぎない。この種の頭椎大刀は、おそらく金銅装の頭椎大刀よりも後出するもので、その年代は7世紀初頭以降と考えることができよう。

鉄装の頭椎大刀としては毛呂山町川角15号墳出土例がある。ただし、現在柄頭と鞘尻は失われてしまっている。鐔は無窓鐔である。この種の頭椎大刀は類例がなく、遺物そのもののデータも不足しているため年代を検討するのは難しいが、現存する刀身の形式をみると、さほど古い遺物とは考えられないようである。なお、桶川市川田谷、岡部町本郷からも頭椎柄頭（前者は鉄製という）の出土した記録があるが、その詳細はまったく不明である。



1 塚本山19号墳出土
2 三ヶ尻林４号墳出土
3 秋山古墳出土
4 大河原２号墳出土
5 児玉出土
6 柏崎５号墳出土
7 原山23号墳出土

第３図　埼玉県の拵付大刀(3) 銀象嵌装大刀・鉄装大刀



1 小見真観寺古墳出土　　5 八幡山古墳出土
2 かぶと塚古墳出土　　6 田木山１号墳出土
3 飯玉古墳出土　　7 広瀬古墳群出土
4 西原１号墳出土　　8 大野原古墳出土

第４図　埼玉県の拵付大刀(4) 圭頭大刀・方頭大刀・蕨手刀

【3】 円頭大刀

県内で発見された円頭大刀はすべて鉄製の拵をもつもので、銀もしくは金銅装のものは現在のところ発見されていない。児玉町秋山古墳群出土例（第3図―3、第5図―4）は銀象嵌が施された例で、柄頭の亀甲繋文の内部には、心葉形の文様がデザインされている。鐔と鎺にも象嵌が施されている。第3図―4は坂戸市大河原2号墳出土例である。象嵌は施されていないが、柄頭の形状に秋山例との共通点がみいだせる。この手の細長い柄頭をもつものには、パルメット文が象嵌された栃木県佐野市トトコチ山古墳出土例（佐野市1975・佐野市郷土博物館1986）や、蕨手刀と共伴した群馬県赤堀村下触牛伏1号墳出土例（小島 他1986）などがあり、鉄装円頭大刀のなかではもっとも新しい時期まで残る形式としてとらえることができる。その実年代は7世紀前葉から中頃までと考えられる。

東松山市柏崎5号墳出土例（第3図―6）は、現在柄頭の部分が失われているため、詳しい構造は明らかにできないが、すんずまりの柄頭を先端から釘を2本打ち込んで固定していたものと推定され、他に例をみない特異なものである。柄は糸巻、鐔は無窓鐔で、簡素なつくりである。類例がなく年代の決め手に欠けるが、刀身の形式から7世紀以降の所産と考えられる（臼杵1984）。

桶川市原山23号墳出土例（第3図―7）は、先細りの柄頭を刀身の茎に直接目釘でとめたものである。この形式の柄頭は比較的多く、ときには象嵌も施されるが、鞘尻として同形の金具が存在するので、単独で出土する例のなかでは鞘尻金具の可能性も考慮にいれなくてはならない。象嵌の施されている例で、鱗状もしくは羽状の文様がある場合には、これは鞘尻とみなすべきであろう。いずれにしろこれらは6世紀末から7世紀にかけての遺物と考えられるが、本例のように柄頭を目釘を用いて茎にとめる方法を採用するのは、拵付大刀全体で後出の技法と見なされる（瀧瀬1984）。したがって本例には7世紀前半の年代が与えられよう。

図を掲載したものの他には、東松山市西原3号墳出土例がある。柄頭は破片で、無窓鐔と、それに接する柄元金具が装着されている。装具はすべて鉄製である。刀身の形式などから7世紀の所産と考えられる。鉄製円頭柄頭は、第3図―5の児玉郡出土例以外に、東松山市三千塚8―3号墳、滑川町大道古墳、大里村円山2号墳からも出土しているが、後2者と児玉郡例の一部は鞘尻金具の可能性が残る。

【4】 圭頭大刀

第4図―1は行田市小見真観寺古墳出土例である。頭椎大刀2振（第2図1・2）と共伴する。銀装の圭頭大刀で、柄は銀線巻の上から革紐を疎に巻いている。鐔は小さな喰出鐔である。鞘口の佩裏側の一部を蒲鉾状に盛り上げ、単環を挿入して一ノ足としている（いわゆる鐶付足金物）。二ノ足は通常の足金物であるが、帯執環は片側に寄っている。

吉見町かぶと塚古墳出土例（第4図―2）は、金銅装で、銀線巻の柄と喰出鐔をもつが、鞘口以外の鞘金具はみうけられない。本庄市飯玉古墳からは、金銅製の覆輪状柄頭・鎺、銅地銀貼りの足金物（2点）・責金物、銅製の鞘口が出土している（第4図―3）。材質が微妙に異なるため、そのすべてが同一の圭頭大刀に装着されたものかどうかは不明である。美里町広木大町5号墳出土例も

飯玉例と同様に金銅覆輪状のもので、無窓鐔と責金物などが共伴する。同一の大刀装具と考えられる。

圭頭大刀も、頭椎大刀と同様に6世紀末から7世紀前半にかけて流行した拵付大刀であるが、小見真観寺古墳出土例は銀装であり、帯執環が佩裏側に寄る古式の足金物をもっていることから（新納1987）、6世紀にまで遡るものと考えられる。他の3例は7世紀前半代におさまるであろう。

また、本庄市御手長山古墳からは、鉄製の圭頭柄頭の破片らしき遺物が出土している。鉄装の圭頭大刀の確実な例としては、銀象嵌の施された福岡県広川町鬼塚2号墳出土例（川述 他1986）以外は現在のところ知られていない。本例はその可能性を示すにとどまるものである。

【5】 方頭大刀

埼玉県内には方形の柄頭をもつ文字どおりの方頭大刀の出土例はなく、圭頭大刀との中間形式のものが2例出土している（第4図―4・5）。4は東松山市西原1号墳出土例で、装具はすべて銅製である。柄頭は刀身の茎に挿入され、懸通孔は茎先にもあけられている。鐔は喰出鐔、足は櫓枠に張り出しをもつ双脚足金物で、鞘尻は抉りの入った栗尻である。5は行田市八幡山古墳出土例である。柄頭は銅製であるが、鞘尻は金銅製である。この形式の大刀に装着される鞘尻金具は、おおむね西原1号墳例のような栗尻のものであり、材質も異なることから、これらは同一の大刀の装具ではないと考えられる。

毛呂山町西戸9号墳からは、銅製の鞘口金具と双脚足金物および鉄製の鳴目が出土している。おそらく方頭大刀とみてよいだろう。双脚足金物は西原1号墳例よりも張り出しは弱い。柄頭は方形であったかもしれない。

変形の柄頭をもつ方頭大刀の年代は、足金物の主流が単脚のものから双脚のものに移行する7世紀後半を中心にとらえられるが、西原1号墳例は、足金物の櫓枠が正倉院蔵の大刀群にみられるような四角錐台状となる以前の段階と考えられることから（穴沢・馬目1979）、7世紀中葉に近い年代観を与えることができる。足金物でいえば西戸9号墳例はそれよりもやや新しいものとみなされよう。

【6】 蕨手刀

蕨手刀は2例出土している。第4図―7は熊谷市広瀬古墳群の熊谷商業高校内円墳から出土した。銅製の喰出鐔と双脚足金物（一ノ足は痕跡、二ノ足は一部）をもつ。櫓枠は四角錐台状である。第4図―8は秩父市大野原古墳出土例である。懸通孔の座金具と足金物（単脚）は銅製だが、鐔は鉄製である。

石井昌国氏によると、これらはいずれも、平造・角棟・短寸無反りのII式に分類され、編年の根拠となる柄反りの度合は小さく、蕨手刀のなかでは古式に属すると考えられている（石井1966）。その年代は、足金物の形式から大野原古墳例のほうが若干古く、7世紀末から8世紀初頭に、広瀬古墳群例が8世紀前半頃に求められるであろう。

【7】 その他の拵付大刀

ここでは、柄頭が存在していないため、上記のいずれにも属さない拵付大刀を紹介する。第2図―5は桶川市西台9号墳出土の金銅装大刀である。装具の遺存状態は悪いが、六窓鐔・鞘口金具・鏂・鞘中金具・鞘尻金具が存在する。鏂は銅製のようだが、他はすべて金銅製である。これらの拵から、本例は頭椎大刀もしくは圭頭大刀と推定される。年代はおそらく7世紀前半。

第4図―6は東松山市田木山1号墳出土例である。銅製の喰出鐔と、佩用のための単環（金銅製）をもつ。足金物は遊離して存在するため、その位置は推定であるが、鞘口の佩裏側に装着されたものであろう。鏂は鉄製である。7世紀前半の遺物と考えられる。

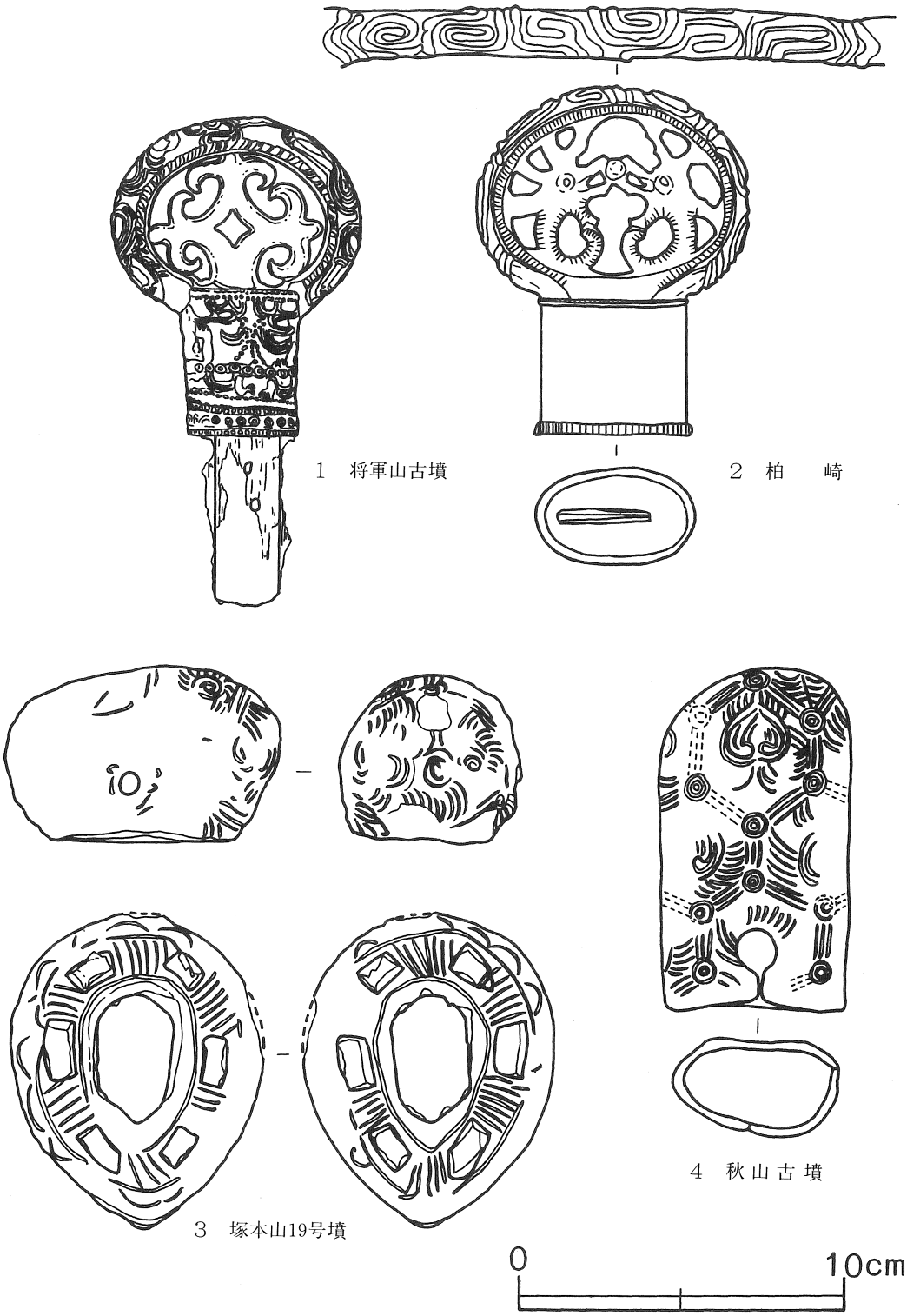
金銅装大刀は本例以外にも、鴻巣市愛宕塚古墳や上里町浅間山古墳、神川町No.123古墳などから出土している。愛宕塚古墳例と神川町No.123古墳例は無窓鐔をもつ大刀である。浅間山古墳例には金銅製の鞘口金具や鞘尻金具（角尻）が残存しているが、鞘口金具の佩裏側には、半円形の切り込みがあり、おそらく田木山1号墳例のような佩用装置をもっていたと考えられる。また、熊谷市大塚古墳からは、長銅丸尻の金銅製鞘尻金具が出土している。

第3図―2は熊谷市三ヶ尻林4号墳出土例である。最近になって鉄製装具に銀象嵌が確認された（図版1参照）。象嵌はすべての金具に施されており、鐔には渦文、柄頭縁および柄元の責金物には連続半円文、鏂には心葉形文が認められる。鞘尻金具は残りが悪いため確認しづらいが縁に連続半円文、全体には鏂と同様の心葉形文が施されるようである。本例はその柄頭の縁金具と推定した責金物の形状がハの字状にひらいているため、頭椎大刀であったと考えられる。そして、他の装具がきちんと残っていることから、柄頭金具が失われたものというよりも、もともと木芯の頭椎柄頭をもった大刀であったと考える方が理にかなっていると思われる。

銀象嵌の施された拵付大刀や刀装具の出土例は、県内ではあと3例ほど認められている。東松山市附川7号墳出土例は表裏および耳部に蕨手状の文様をあしらった小さな無窓鐔をもつ拵付大刀である。大宮市山王塚古墳から出土した鐔は八窓鐔で、蕨手状の文様が周囲の耳の部分にのみ施されている。熊谷市小曾根神社付属地の出土例は六窓鐔であり、三ヶ尻林4号墳例と同様の象嵌施文をもつ。

これらの遺物の年代は、三ヶ尻林4号墳例と小曾根神社付属地例、および附川7号墳出土例が象嵌文様の類例などから6世紀末から7世紀初頭頃と推定される。そして、耳の部分にのみ文様が施される山王塚古墳例は、平の部分にまで象嵌を施す以前の段階と考えられ、6世紀後葉に属するものと思われる。

象嵌文様をもたない簡素な鉄装大刀の例としては、美里町塚本山9号墳、北本町鹿島1号墳出土例などをあげることができる。両例とも抉りのはいった鞘尻金具をもつ。この形態の鞘尻金具は、方頭大刀の西原1号墳にみられる栗尻の鞘尻金具よりも古い形式のものと考えられ、その年代は7世紀前葉と推定される。



第5図　環頭柄頭と銀象嵌柄頭

3．出土古墳の概要

埼玉県内において、拵付大刀もしくは刀装具を出土した遺跡は、56遺跡（地点）にのぼる（表参照）。ここでは、拵付大刀の出土した古墳を各地域ごとに簡単に概観し、前章で触れることのできなかった遺物について若干の解説を加えておく。

【1】 県南地方

当地方の古墳群は、荒川流域、利根川右岸、古利根川および元荒川流域に形成されているが、大宮台地上では、他の地域と比べると古墳の築造が盛んでなく、大規模な古墳群は存在していない。

荒川の支流である鴨川の流域には、いくつかの古墳群が形成されているが、銀象嵌の鐔（註１）を出土した山王塚古墳はそのうちのひとつである植水古墳群に属している。山王塚古墳の規模は不明だが、石室には、鴨川流域の古墳で普通に用いられている凝灰岩ではなく、緑泥片岩が使用されている（大宮市1986）。

荒川流域左岸を南北に延びる台地上に形成された桶川市の川田谷古墳群は、その南端に位置し、４世紀後半から５世紀にかけての築造とされる熊野神社古墳を除くと、おおむね６世紀後半から築造された古墳群と考えられている。川田谷古墳群はいくつかの支群にわけられるが、そのうち最も北に位置する西台古墳群と、その南側にある原山古墳群から拵付大刀が出土している。ともに10～20基ほどの円墳で構成されている古墳群である。金銅装大刀を出土した西台９号墳は径23ｍで、凝灰岩を使用した胴張りを有する横穴式石室を内部主体としている（塩野・増田1970）。原山23号墳は、その規模は不明だが、凝灰岩の切石を使用した横穴式石室を主体部としている（塩野他1978）。ともに埴輪は確認されていない。

鴻巣市愛宕塚古墳は、大宮台地の西縁、荒川左岸に位置する馬室古墳群阿弥陀堂支群に含まれるが、その詳細は不明である。出土遺物には鉄刀・銅釧・玉類などがあり、鉄刀には、金銅製の鏥が装着され、同じく金銅製の無窓鐔や責金物などがあるため、金銅装の飾り大刀が存在したと考えられる（東京国立博物館1986・鴻巣市1989）。

【2】 入間地方

入間地方は、武蔵野台地の東北周縁部にあたり、古墳は入間川とその支流および新河岸川の流域を中心に分布している。

入間川支流の越辺川流域には多くの古墳群が立地しているが、拵付大刀は毛呂山町西戸古墳群、川角古墳群および坂戸市大河原古墳群から出土している。いずれも小規模な円墳を主体とした古墳群である。鉄装頭椎大刀を出土した川角15号墳は、南北9.6ｍ、東西７ｍの円墳で、河原石を積み上げた胴張りを有する横穴式石室をもつ（村木1988）。西戸古墳群は調査された範囲では、径10～15ｍ程度の円墳以外に、墳丘のない主体部が確認されており、６世紀後半から７世紀代にわたって形成された群小墳と考えられている（村木 他1987）。大河原２号墳は径17ｍほどの円墳で、凝灰岩切り石積みの両袖式横穴式石室をもつ。出土遺物は鉄装円頭大刀の他に、鉄鏃・刀子・須恵器があ

り、須恵器は7世紀中葉の年代を示している（柳楽1988）。

的場古墳群は入間川中流域左岸に位置し、現全長42mの前方後円墳である牛塚古墳を中心に形成された古墳群である。牛塚古墳は河原石を使用した胴張りの横穴式石室をもち、雲珠や鏡板（心葉形十字文透）などの馬具や、鉄鏃・指輪など、豊富な副葬品が出土している（川越市1972）。しかし、大刀の出土はなく、刀装具としてわずかに鉄製の鞘尻金具（角尻）がみられるに過ぎない。馬具の年代はＴＫ43～ＴＫ209型式期のものと考えられている（関・宮代1987）。

【３】 比企地方

比企地方は、秩父山地の東縁に当たり、荒川支流に開析された谷に分割された丘陵や台地がいくつも形成されている。当地域には山の根古墳や雷電山古墳など、５世紀前半にさかのぼる古墳が存在し、古墳時代後期には、数多くの大規模な古墳群が築造された。

松山台地には、胴張りをもつ横穴式石室を特徴とした古墳群が形成されたが、そのうち東松山市柏崎古墳群、附川古墳群、下唐子古墳群、西原古墳群、滑川町岩屋塚古墳群の中に拵付大刀もしくは刀装具を出土する古墳が含まれている。

柏崎古墳群は、前方後円墳２基と十数基の円墳で構成される。５号墳は径30mほどの円墳で、円頭大刀を含む鉄刀と鉄鏃の他には耳環・玉類の出土をみるのみである（金井塚 他1968）。銀象嵌大刀を出土した附川７号墳は、附川古墳群中で発掘調査が行われた５基の円墳のうちのひとつである。主体部は切石を使用した複室構造の胴張りを有する横穴式石室で、鉄鏃・刀子・耳環等が共伴している（金井塚1971）。

胄塚古墳は径37mを測り、２段築成の大型円墳で、下唐子古墳群のなかでもっとも大きな円墳である。石室も全長7.7mと大規模な複室の胴張りをもつもので、副葬品には杏葉（斜格子文心葉形）や雲珠など豊富な馬具類と鉄鏃・須恵器などがある（金井塚 他1964）。刀装具としては、銅地銀張の責金物と銅製角尻の鞘尻金具が存在し、飾り大刀が副葬されていたことを窺わせる。馬具はＴＫ209型式期に属するものと、ＴＫ43～ＴＫ209型式期のものの２つのセットに分かれると考えられている（関・宮代1987）。

西原古墳群で調査された古墳は、いずれも胴張りを有する横穴式石室をもち、径11～13m程度の小円墳であったが、１号墳からは方頭大刀や銅鋺が、３号墳からは鉄装円頭大刀が出土している（金井塚・渡辺1976）。岩屋塚古墳群は、小規模な数基の円墳で構成され、大道古墳もそのひとつである。胴張りの横穴式石室をもち、鉄製刀装具と耳環・玉類などが出土している（木村 他1986）。刀装具は円頭柄頭か丸尻の鞘尻金具どちらにもとれる形態を呈している。目釘などは存在していない。

岩殿丘陵上に位置する田木山古墳群では、２基の円墳が調査された。ともに小規模な円墳で、主体部はやはり胴張りのある複室構造の横穴式石室である。１号墳からは拵付大刀を含んだ鉄刀が３振と刀子・耳環が出土している。

比企丘陵の北東部に位置している三千塚古墳群は、雷電山古墳を中心に３基の前方後円墳と約250基を数える円墳で構成されていた（埼玉県1982）。この古墳群からは金銅装の頭椎大刀が出土して

いるが、古墳の多くが破壊されているため、その全容を窺い知ることができないのが惜しまれる。

かぶと塚古墳は吉見丘陵に形成された久米田古墳群に属し、尾根のもっとも高所に構築された径28mの大円墳で、2段築成の墳丘をもつ。主体部は胴張りを有する横穴式石室である。圭頭大刀の他には北武蔵では例のない大量の須恵器が出土している（吉見町1978)。須恵器はＴＫ43～ＴＫ217型式に相当すると考えられる。

【4】 秩父地方

秩父地方は、秩父山地に囲まれた盆地であり、古墳は荒川やその支流の河岸段丘上に立地している。秩父市大野原古墳群は荒川支流の横瀬川の左岸に、数十基の円墳で形成されており、蕨手刀を出土した古墳は径4～5mの小円墳と推定されている。主体部は箱式石棺で、蕨手刀の他に、鉄刀・鉄鏃・和同開珎が出土したという（小林1988)。

銀象嵌の環頭大刀が出土した皆野町稲荷塚古墳は、荒川左岸に築造された金崎古墳群に含まれる古墳である。古墳群のなかには胴張り無袖の横穴式石室をもつものが確認されている（田中1980)。

【5】 児玉地方

児玉地方は県内でもっとも古墳の多い地域であり、県境を流れる神流川によって形成された本庄台地の縁辺部や、小山川（身馴川)、女堀川、神流川など河川の流域に多くの古墳群が分布している。

本庄市塚合古墳群、旭・小島古墳群は本庄台地上に築造された古墳群である。塚合古墳群は通称百八塚と呼ばれ、現在よりもはるかに多くの古墳が存在していたと考えられる。前方後円墳も知られているが、その大半は円墳である。41号墳は径10mほどの円墳で、主体部は角閃石安山岩を積み上げた横穴式石室である。出土遺物のなかに、銅製の責金物や鉄製の鴟目・足金物(単脚)・鞘尻金具（角尻）などがあり、ある程度の拵をもった大刀が副葬されていたと考えられる（菅谷 他1969)。飯玉古墳も塚合古墳群に属し、金銅製の圭頭大刀装具が出土遺物として知られているが、古墳は削平されてしまったもので、詳細は不明である（本庄市1986)。

旭・小島古墳群も円墳を主体とした古墳群で、現在知られるだけでも80基あまりの古墳が築造されていたと考えられる。刀装具の出土は少なく、鉄製の鞘尻金具などがみられるにすぎない。(本庄市1976・1986)。御手長山古墳は径42mと旭・小島古墳群のなかでは大型の円墳である。埴輪をもち、主体部は胴張りぎみの横穴式石室で、出土遺物には鉄鏃・弓金具・挂甲小札・鞍金具などがある。刀装具は、鉄製の圭頭柄頭の破片など若干の出土をみる（長谷川1978)。

小山川（身馴川）右岸に分布する古墳群には児玉町秋山古墳群、美里町広木大町古墳群などがあり、古墳の総数は200基以上を数える。秋山古墳群は6世紀中頃の築造と推定される諏訪山古墳を含む2基の前方後円墳と40基以上の円墳で構成されている。当古墳群に含まれる庚申塚古墳は、金銅製の責金物や鉄製鞘尻金具などを出土しているが、最近の範囲確認調査で二重の周溝をもつ径30mほどの円墳であることが明らかとなった（大谷 他1990)。主体部は胴張りを有し、模様積みの両袖式の横穴式石室である。出土遺物には雲珠・辻金具などの馬具や、鉄鏃・鉄刀・刀子・耳環・玉

類などがあり、馬具の年代はＴＫ43型式期を中心に考えられている（関・宮代1987）。

秋山古墳群からわずか下流に位置する広木大町古墳群は、６基の前方後円墳と、60基以上の円墳で形成されている。５号墳から金銅製の圭頭大刀装具が出土している（美里町1986）。

小山川を挟む対岸の生野山丘陵上には生野山古墳群が、さらに下流には塚本山古墳群が立地している。生野山古墳群では前方後円墳２基と100基ほどの円墳が確認されており、古くは５世紀中頃に比定される生野山将軍塚古墳（円墳・径60ｍ）や、６世紀前半の築造と考えられる銚子塚古墳（前方後円墳・全長58ｍ）などが含まれている（金井塚1986）。この生野山古墳群からは頭椎大刀が出土したとされているが、出土した古墳の詳細は不明である。

塚本山古墳群は大久保山丘陵上に立地しており、現在の古墳の総数は170基以上にものぼるが、そのほとんどは円墳である。発掘された古墳は28基を数え、模様積みの胴張りを有する横穴式石室を主体とするものが多くを占める。このうち拵付大刀は９号墳と19号墳から出土しており、特に19号墳から出土した鉄装頭椎大刀は銀象嵌が施されている優品である。９号墳は発掘区西側斜面の中位に位置し、墳丘は0.5ｍとかなり扁平であるが、見かけ上は径25ｍの円墳である。石室は小型の部類に入り、鉄装大刀以外には鉄鏃や須恵器甕などが出土している。19号墳は南斜面の最下段に位置する。径11×８ｍ、高さは1.25ｍの円墳で、墳丘はさほど大きくないが、調査されたものの中では比較的大型の石室をもつ。頭椎大刀以外の遺物は少なく、鉄鏃・耳環・須恵器などである。９号墳、19号墳ともに埴輪は確認されていない（横川 他1977）。

神川町青柳古墳群は神流川扇状地に立地している古墳群である。現在、前方後円墳６基を含む200基あまりの古墳が確認されている。青柳古墳群は、いくつかの支群にわけることができるが、そのほぼ中央に位置する南塚原古墳群の神川町No.123古墳と、もっとも上流に位置する城戸野古墳群の４号墳から拵付大刀および刀装具が出土している。神川町No.123古墳は、径15ｍほどの円墳で、主体部はわずかに胴張りをもつ横穴式石室である。埴輪の存在も確認されている。玄室内からは鉄刀・鉄鏃・弓金具・刀子・耳環・玉類などが出土し、鉄刀６振のうち１振には金銅製の無窓鐔と鎺が装着されていた（田村1989）。城戸野４号墳は古墳群の立地する微高地のもっとも東に位置する。削平をうけた石室の一部が検出され、鉄刀・鉄鏃・弓金具・耳環・玉類が出土した。刀装具としては銅製の鴟目金具が１点出土したに過ぎないが、これだけでも拵付大刀の存在が予想される（増田 他1973）。

【６】 大里地方

大里地方における古墳は、おもに荒川左岸に広がる櫛挽台地と、その対岸、比企丘陵の北側にあたる江南台地上に立地しているが、荒川と利根川によって形成された沖積低地の自然堤防上にもその分布が確認されている。

荒川流域、櫛挽台地の南縁、および江南台地の北縁にあたる河岸段丘上には数多くの古墳群が形成されているが、拵付大刀の類は花園・寄居町小前田古墳群、川本町塚原古墳群、鹿島古墳群、熊谷市三ヶ尻古墳群、万吉下原古墳群、大里村円山古墳群から出土している。

小前田古墳群には、かつては100基あまりの古墳が存在していたと考えられるが、調査された古

墳は帆立貝式古墳１基をのぞいてすべて円墳で、その規模は径15ｍ前後のものが多い。18号墳は胴張りを有する横穴式石室のみが検出されたもので、墳丘等の規模は不明である。鉄刀・鉄鏃・弓金具・刀子・耳環とともに銅製の有窓鐔が出土している。この鐔にあう鉄刀は存在していない（瀧瀬1986）。88号墳は径25ｍほどのやや規模の大きい円墳で、胴張りの横穴式石室内から鉄刀・耳環・玉類などが出土している。刀装具には銅製の鴟目と角尻の鞘尻金具がある（中川 他1958）。

塚原古墳群は、前方後円墳である蛤塚古墳をはじめとして、20基ほどの古墳群が存在したと推定されるが、３基の小円墳が調査されたのみである（埼玉県教育委員会1979）。蛤塚古墳の出土遺物として、金銅製の頭椎柄頭・鉄製無窓鐔・ガラス小玉各１点が長瀞綜合博物館に所蔵されているが、それ以外の詳細は不明である（新井1986）。

鹿島古墳群は80基以上の円墳で構成され、うち27基が調査されている。検出された主体部はすべて河原石を用いた胴張りの横穴式石室であり、副葬品は鉄刀・鉄鏃・刀子・耳環など総じてその量は少なく、玉類の出土をみないのが特徴的である。拵付大刀を出土した古墳は３基あげることができる。１号墳は径15ｍほどの円墳と考えられ、銅地銀張りの責金物と、鉄製の抉りの入った鞘尻金具が出土している。鉄刀は、背側に２つの孔があけられた鐔が装着されており、鞘尻金具はこの鉄刀に付属するものであろう。16号墳（径14ｍ）からは、無窓鐔付鉄刀と、単脚足金物が装着された鉄刀が出土している。20号墳（径20ｍ）からは鉄製足金物（単脚）と鞘口金具が出土しており、共伴する無窓鐔をもつ短い鉄刀の装具であったと考えられる。なお、鐔付の鉄刀が、６号墳（径16ｍ）・13号墳・21号墳・24号墳（径21ｍ）から出土している（塩野 他1972）。

三ヶ尻古墳群は前方後円墳１基と40基を越える円墳で形成され、24基の古墳が調査されている。三ヶ尻林４号墳（やねや塚古墳）は径18ｍ、高さ３ｍの円墳である。築造当時の形態がもっとも良好に残っており、２段の葺石帯の中段に円筒埴輪列が巡っていた。主体部は河原石を使用した横穴式石室で、わずかに胴張りを有している。石室内からは４振の鉄刀の他に、鉄鏃・刀子・弓金具・銅釧・耳環・玉類・須恵器などが出土した。鉄刀の内１振は銀象嵌の施された拵付大刀である。須恵器はＴＫ43型式期に平行するものと考えられる（小久保 他1983）。

万吉下原古墳群では数基の円墳が確認されている。１号墳は径11ｍの円墳で、凝灰岩を用いた横穴式石室を主体部とする。撹乱を受けており正確なプランは不明であるが、玄室内から鉸具や耳環などとともに金銅製の責金物２点と鞘尻金具（角尻）１点が出土した。責金物のうちひとつは稜をもち八角形を呈するもので、これらの刀装具は環頭大刀のものである可能性が指摘できる（菅谷 他1991）。

円山古墳群は江南台地の東端に位置し、３基の円墳が調査されている。３基とも規模は径17ｍ前後である。２号墳は主体部が破壊されていたが、鉄刀や鉄鏃・刀子および鉄製柄頭（もしくは鞘尻金具）が出土した。また、周溝からは多くの円筒・形象埴輪が検出されている（埼玉県1982）。

櫛挽台地の北縁部にあたる利根川右岸沿いには、深谷市木の本古墳群が立地している。かつては前方後円墳を中心に多くの小円墳が存在しており、金銅装の頭椎大刀が出土したというが、その詳細は不明である（深谷市1969）。なお、岡部町に分布する古墳からも、拵付大刀や頭椎柄頭が出土した記録（写真）があるが、やはり詳しいことはわからない（山口1950・埼玉県1951）。

荒川左岸の自然堤防上に立地する熊谷市中条古墳群は、鎧塚古墳や女塚１号墳などの帆立貝式古墳や円墳を主体とする古墳群であるが、この古墳群に含まれる大塚古墳は、径59ｍの基壇上に径35ｍの墳丘を構築した円墳と考えられている。主体部は胴張りを有する横穴式石室で、石室内からは挂甲小札・鉄鏃・玉類などとともに、長胴丸尻の金銅製鞘尻金具が出土している（寺社下1985）。また、中条古墳群のやや西側にあたる熊谷市小曾根からは、出土遺跡は不明であるが、耳環・玉類とともに銀製の喰出鐔と鞘口金具が装着された大刀の破片と、銀象嵌の有窓鐔が出土している（東京国立博物館1986）。

熊谷市広瀬古墳群もまた荒川左岸の自然堤防上に位置し、上円下方墳とされる宮登古墳をはじめ数基の円墳や方墳で構成されていたと考えられる。この古墳群に含まれる熊谷商業高校敷地内の円墳からは、蕨手刀が出土しているが、共伴遺物はなく、主体部も不明確である（小林1957）。

【７】 北埼玉地方

北埼玉地方は、利根川と荒川の氾濫原にあたり、古墳群は氾濫によって形成されたいくつもの自然堤防と、関東造盆地運動に伴う地盤沈降による洪積台地のなごりである微高地上に位置している。この微高地は現在は水田面から１ｍほどの高まりにすぎないが、古墳群が築造された当時は、かなり比高差のある台地であったと考えられる。

行田市埼玉古墳群は、こうした微高地上に立地する古墳群であるが、県内最大級の前方後円墳である二子山古墳（全長135ｍ）や辛亥銘鉄剣の出土で著名な稲荷山古墳（全長120ｍ）を含む前方後円墳９基と、径102ｍもの大円墳である丸墓山古墳の他、十数基の小円墳で構成されている。主体部の調査は稲荷山古墳と将軍山古墳の２基のみ行われているが、将軍山古墳からは、金銅装の環頭大刀と三輪玉をつけた捩り環頭大刀の一部が出土している。将軍山古墳は全長101ｍの前方後円墳で、主体部は横穴式石室であるが詳細は不明である。大刀の他にも多くの武器や馬具が出土している（埼玉県1982 他）。馬具には環状鏡板付轡や十文字心葉形鏡板付轡、鉄製輪鐙、棘葉形杏葉などがあり、その年代はＴＫ43～ＴＫ209型式期に比定されている（関・宮代1987）。

八幡山古墳の属する若小玉古墳群は、埼玉古墳群の北側の微高地に位置している。前方後円墳や方墳を含めた数基の古墳の存在が知られていただけであるが、最近の調査では削平された前方後円墳１基と、径10ｍクラスの小円墳21基が確認されている（中島1991）。八幡山古墳は径74ｍの円墳と推定され、複室構造の巨大な横穴式石室を主体部としている。出土遺物には方頭柄頭・鉄鏃・銅鋺・須恵器などがあり、漆塗木棺の破片も発見されている。

小見古墳群は、埼玉古墳群の北方、星川の右岸上に位置し、全長112ｍの前方後円墳である小見真観寺古墳を中心に形成されている。小見真観寺古墳には緑泥片岩の板石を組み合わせた横穴式石室と、箱式石棺の２つの主体部をもつが、遺物はすべて後者の箱式石棺内から検出された。圭頭大刀と頭椎大刀２振の他には、挂甲小札・衝角付冑・鉄鏃・銀装刀子・銅鋺などが出土している（埼玉県1982 他）。

4．まとめ

拵付大刀の盛行年代は、6世紀後半から7世紀前半が中心となる。埼玉県においても例外ではないが、鉄装大刀に限っては、7世紀前半にその中心が求められるようである。県内における拵付大刀の出土古墳を分析すると、

①将軍山古墳や小見真観寺古墳のように、他の副葬品も豊富な大型の前方後円墳

②冑塚古墳、吉見かぶと塚古墳、庚申塚古墳など古墳群の朋主的存在である大型円墳

③三ヶ尻林4号墳、塚本山19号墳など古墳群のなかでは比較的墳丘や主体部の規模が大きい円墳

④多くがこの範疇に入るが、古墳群を構成する一般的な小円墳

以上の4つに分類できると考えられる。

さらにそれらを拵付大刀の種類でみると、①や②は飾り大刀が多く、③は飾り大刀でも象嵌のもの、④は方頭大刀や蕨手刀、鉄装大刀の多くを含んでおり、年代的にも、6世紀後半から7世紀初頭にかけては主として①と②の古墳に副葬されることが多く、③と④の古墳には7世紀以降に副葬されるようになる傾向が認められよう。このことは、西暦600年頃を境に、県内の在地首長層への組織介入による畿内政権の軍事的な支配が確立し、その後は中央集権体制のもとで、直接支配が共同体の構成員にまで及んでいったことがうかがえるのである。それとともに、権力のシンボルであった飾り大刀にかわり、より装飾性の乏しい拵付大刀が佩用されるようになった。

鉄製の鐔以外に装具をもたない鉄刀は、古墳時代後期の古墳から出土する武器のなかでは、普遍的にみられる遺物である。そこにみられる鐔は、飾り大刀に多くみられる喰出鐔ではなく、ある程度の大きさをもつ倒卵形の鐔である。こうした鐔は、白兵戦における護拳の用をなすものであり、それは、古墳時代の直刀が、日本刀のように相手を「切る」のではなく「刺す」用途をもっていたにしても、重要な役目には違いなかった。したがってこれらの大刀の多くは、武器本来の機能である実戦を想定したものであったと考えられる。

では、拵付大刀にみられる他の部分に装着される金具の用途は何か。責金物は柄木や鞘木を約するもの、足金物は佩用に用いるものであるのはいうまでもない。鞘尻金具も大刀を腰に佩用して移動する時に、損傷を受けやすい鞘尻の部分を保護するためのものと考えられる。柄頭に金具を用いるのは、柄の先端に重さをもたせることによって、バランスを保つ役割があるとはいうものの、やはり佩用する際にもっともひとめにつく部分であるがために、装飾の役割が第一義であったに違いない(註2)。このようにみてくると、これらの金具は、基本的には、総じて佩用という役割のためにあるものと考えることができる。したがって、鐔以外の部分に鉄製の金具をもつ鉄装大刀とは、もっとも簡素な材質を用いて佩用するように工夫された拵付大刀といえるのではないだろうか。言葉をかえるならば、戦闘にも耐えうるが、むしろ佩用することに重きを置いた拵付大刀と位置づけることができよう。

環頭大刀をはじめとする金・銀の飾り大刀よりも、このような性格をもった鉄装大刀の出土例が多いことが埼玉県の特徴としてとらえられる。具体的に数値をあげてみると、埼玉県内から出土した拵付大刀と刀装具のうち、出土地および材質が不明のものを除くと、総点数は62点を数える。そ

のうち鉄装のものは21点であり、その割合は34%となる(註３)。この数値を他の関東近県と比較してみよう。群馬県は飾り大刀の割合が非常に多く、鉄装大刀は全体の４%（６/135）に過ぎない。茨城県（８/47)、千葉県（12/72）はともに17%、栃木県は26%（12/46)、東京都は22%（４/18）で、やはり埼玉県よりもその割合は少ない。関東地方でもっとも鉄装大刀や鉄製刀装具の占める割合が多いのは神奈川県で38%（12/32）であるが、埼玉県はそれに次いで鉄装大刀の分布が密である地方といえるだろう。旧武蔵国で考えても32%（29/91）で、全国の18%（172/974）という数値と比較してやはりその傾向を裏づけていると考えられる(註４)

県内において、鉄装大刀の出土する古墳は、そのほとんどが古墳群のなかで、規模や主体部などに優位性をもつことのない一般的な小円墳である。さらに、共伴するのは鉄鏃などの他の武器が多く、馬具を伴う例はほとんどない。その顕著な例として川本町鹿島古墳群をあげることができる。鹿島古墳群では調査された27基すべてに玉類の出土がない。その反面、鉄刀・鉄鏃・弓金具という実用に長けた武器のセットが副葬されている。そこには半専門的な武装集団、あえていうなら歩兵集団の姿を垣間見ることができるのではないだろうか。そして、鉄装大刀に代表される簡素な拵付大刀を佩用していた人物の中には、こうした集団の長的存在も含まれていたと考えられる。

畿内政権が東国における支配を確立するためには、強大な在地勢力であった毛野国に対する政策を考えねばならなかった。群馬県に飾り大刀が異常なほど大量に出土しているのはその対策のひとつの裏づけといえよう。そして、こうした懐柔策だけではなく、毛野国に対する牽制を目的として、埼玉の地に存在していた在地勢力に対して全面的なバックアップを行い、その結果が、稲荷山古墳にはじまる埼玉古墳群の形成をもたらしたと考えられている（金井塚1986)。機能的な拵付大刀が埼玉に多くみられる背景には、古墳時代後期における、畿内政権の東国進出にともなう緊張した軍事的な対立関係が大きく影響していたのではないだろうか。

(1991年５月８日脱稿)

謝　辞

本稿で用いた資料の調査に当たっては、埼玉県立博物館、埼玉県立歴史資料館、埼玉県立埋蔵文化財センター、長瀞綜合博物館の各機関、および、金子真土、西口正純、今泉泰之、宮　昌之、岩本克昌の各氏にお世話になった。また、穴沢咏光氏には柏崎出土資料に関して、数々の御配慮と御教示をいただいた。厚く御礼を申し上げます。

註

1　この遺物は東京国立博物館に所蔵されているもので、「北足立郡植水村大字水判土字山皇塚474」から出土し、鉄刀が伴出するとの記録がある（東京国立博物館1986)。『大宮市史』によれば、山王塚古墳は江戸時代に発掘され、そのとき出土した鉄刀が現存するものと伝えられている。したがって東博の遺物は山王塚古墳の出土遺物とみてよいだろう（大宮市1968)。

2　機能性を重視するならば、大刀を佩用する際に損傷を受けやすい鞘尻の部分に金具をあてることのほうが、柄頭に金具を用いるよりも優位性が認められるようである。したがって、円頭形の鉄製金具が単独で出土した場合は、それを鞘尻と考えた方が確率が高いといえるかもしれない。

3　刀装具に関しては、材質が同じで、重複するもの（例えば鞘尻金具が2個体の場合は2つに数える）以外は、ひとつの大刀に装着されていたものとみなしている。

4　これらの数値は、筆者のデータベースに入力されたカードをもとにしており、平成3年5月現在までに管見に触れたものに限られている。埼玉県以外は、環頭大刀は除いており、蕨手刀もすべては網羅していない。反面、古墳出土以外の出土例を含んでいる。また、材質不明なものは鉄装大刀以外のものに含まれている。したがって、かならずしも正確な数値とは言えないが、環頭大刀はそのほとんどが飾り大刀に含まれるので、こうした鉄装大刀の割合は減ることはあっても増えることはなく、ここに示した傾向の根拠として十分耐えうるものと考える。

参考・引用文献（一覧表にあげたものを除く）

穴沢咏光・馬目順一1976　龍鳳文環頭大刀試論　— 韓国出土例を中心として —　百済研究 第7輯 忠南大学校百済研究所

穴沢咏光・馬目順一1979　郡山市牛庭出土の銀作大刀　福島考古 20号　福島県考古学会

石井昌国1966　蕨手刀　雄山閣

臼杵　勲1984　古墳時代の鉄刀について　日本古代文化研究 創刊号　古墳文化研究会

金井塚良一1986　日本の古代遺跡 31 埼玉　保育社

川述昭人 他1986　鬼塚古墳群　広川町文化財調査報告書第5集　広川町教育委員会

小久保徹 他1983　埼玉県における古墳出土遺物の研究 I　— 鉄鏃について —　研究紀要 1983　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小島敦子 他1986　下触牛伏遺跡　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

後藤守一1968　奈良朝以前の外装　新版日本刀講座 第8巻 外装編　雄山閣

佐野市1975　佐野市史 資料編 1 原始・古代・中世

佐野市郷土博物館1986　よみがえる古墳　— 佐野とその周辺 —

関　義則・宮代栄一1987　県内出土の古墳時代の馬具　埼玉県立博物館紀要—14　埼玉県立博物館

瀧瀬芳之1984　円頭・圭頭・方頭大刀について　日本古代文化研究 創刊号　古墳文化研究会

田中一郎1980　金崎古墳群　埼玉県指定文化財報告書第12集　埼玉県教育委員会

田辺昭三1981　須恵器大成　角川書店

中島洋一1991　北大竹遺跡（若小玉古墳群）の調査　第24回遺跡発掘調査報告会発表要旨　埼玉考古学会 他

新納　泉1983a　装飾付大刀と古墳時代後期の兵制　考古学研究 第30巻第3号　考古学研究会

新納　泉1983b　まとめ (1) 武器　湯舟坂2号墳　久美町文化財調査報告第7集　久美町教育委員会

新納　泉1987　戊辰年大刀と装飾付大刀の編年　考古学研究 第34巻第3号　考古学研究会

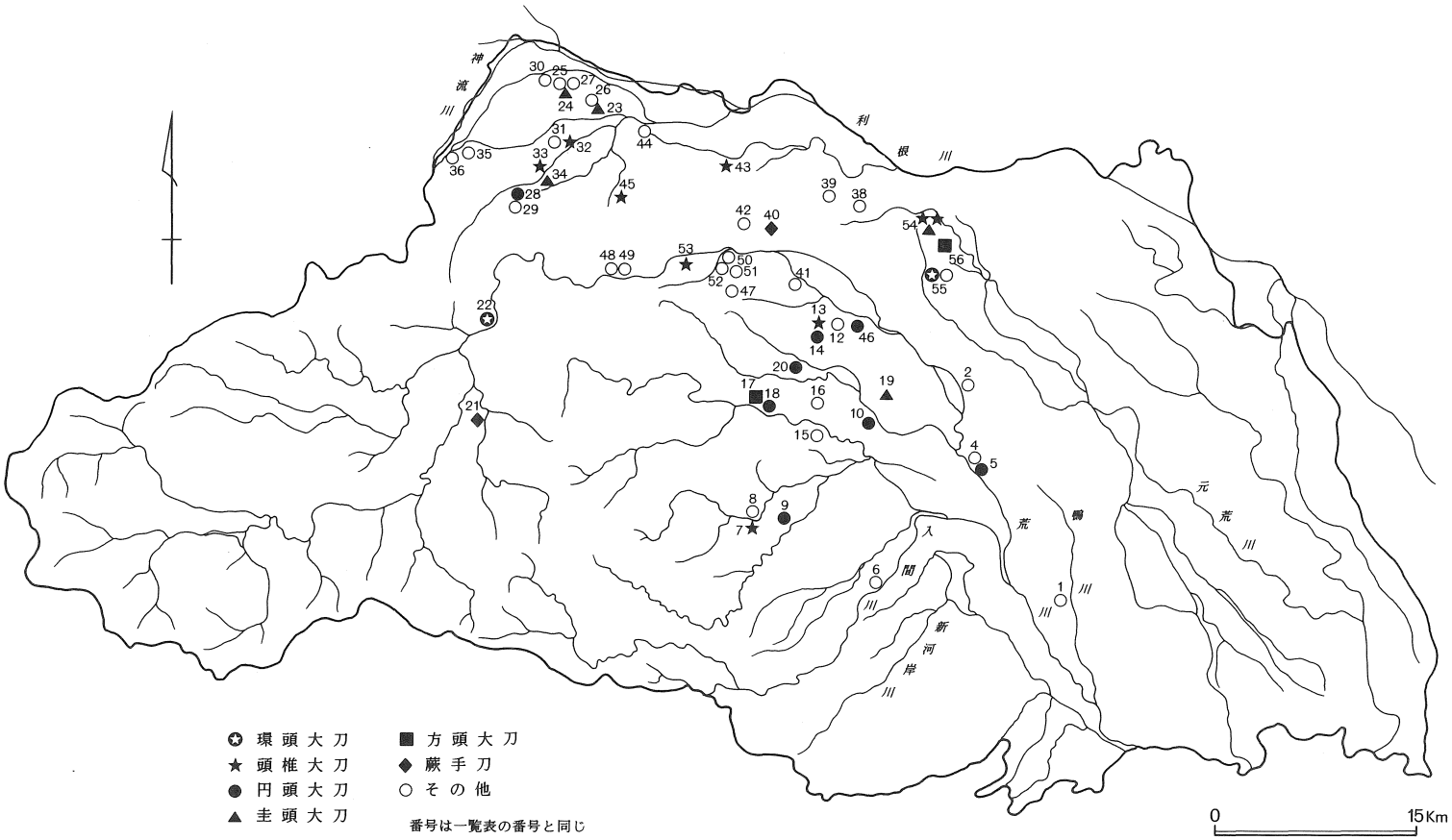
保田義治 他1988　柳谷古墳　津山市埋蔵文化財発掘調査報告第24集　津山市教育委員会 他

町田　章1976　環刀の系譜　研究論集 III　奈良国立文化財研究所

渡辺 昇 他1987　中井古墳群・中井鴨池窯跡　兵庫県文化財調査報告書第38冊　兵庫県文化協会

図版出典

第１図―１　穴沢・馬目1976所載図をもとに、東京国立博物館1986および後藤1968所載の写真を参考に作図
　　２　穴沢呼光氏提供の実測図による
　　３　神林淳雄氏資料（國学院大学蔵）をもとに、東京国立博物館1986所載の写真を参考に作図
第２図―１　神林淳雄氏資料による
　　２　後藤1936所載図をもとに、埼玉県1982所載の写真を参考に作図
　　３　筆者実測（根岸喜夫氏所蔵・埼玉県立博物館保管）
　　４　筆者実測（長瀞綜合博物館所蔵）
　　５　筆者実測（埼玉県立博物館所蔵）
第３図―１　筆者実測（埼玉県立歴史資料館所蔵）
　　２　筆者実測（埼玉県立埋蔵文化財センター所蔵）
　　３　柄頭は神林淳雄氏資料、他は埼玉県1951所載の写真より作図
　　４　柳楽1988所載図より作図
　　５　筆者実測（埼玉県立博物館所蔵）
　　６　金井塚 他1968所載図および写真より作図
　　７　塩野 他1978所載図より作図
第４図―１　神林淳雄氏資料による
　　２　吉見町1978所載図より作図
　　３　長谷川・石橋1985所載図より作図
　　４　金子真土氏提供の実測図による
　　５　小川 他1980所載図より作図
　　６　筆者実測（埼玉県立歴史資料館所蔵）
　　７　小林1957所載図より作図
　　８　小林1988所載図より作図
第５図―１　穴沢・馬目1976所載図をもとに、後藤1968所載の写真を参考に作図
　　２　穴沢呼光氏提供の実測図による
　　３　筆者実測（埼玉県立歴史資料館所蔵）
　　４　神林淳雄氏資料による



第6図　拵付大刀等出土遺跡分布図

埼玉県内拵付大刀等出土一覧表

番号	遺跡名	所在	遺構	遺物	共伴遺物	挿図番号	文献
1	山王塚古墳	大宮市水判土字山王塚474	円墳	銀象嵌鐔	鉄刀・形象埴輪		1・2
2	愛宕塚古墳（氷川神社境内）	鴻巣市滝馬室字中間	古墳	金銅装大刀	鉄刀・銅釧・耳環・玉類		1・3
3	（不祥）	桶川市川田谷	不明	鉄製頭椎柄頭			4
4	西台9号墳	桶川市大字川田谷字西台	円墳	金銅装大刀	鉄刀・耳環	2図－5	5
5	原山23号墳	桶川市大字川田谷	円墳	鉄装円頭大刀	鉄刀・鉄鏃・耳環	3図－7	6
6	牛塚古墳	川越市大字的場字牛塚2473	前方後円墳	鉄製鞘尻	鉄刀・鉄鐔・鉄鏃・刀子・銀線巻刀子柄・雲珠・辻金具・十字文透心葉形鏡板・指輪・耳環・玉類・須恵器（墳丘）		7
7	川角15号墳	入間郡毛呂山町川角	円墳	鉄装頭椎大刀	鉄鏃・耳環・玉類		8・9
8	西戸9号墳	入間郡毛呂山町西戸	古墳	鉄製鳴目・銅製鞘尻・足金物	鉄鏃・刀子		10・11
9	大河原2号墳	坂戸市大字北峰字大河原7-7	円墳	鉄装円頭大刀	鉄鏃・刀子・須恵器・土師器（墳丘）	3図－4	12
10	柏崎5号墳	東松山市大字柏崎	円墳	鉄装円頭大刀	鉄刀・鉄鏃・刀子・弓金具・耳環・玉類	3図－6	13
11	（不祥）	東松山市大字柏崎？	不祥	金銅製双龍環頭柄頭		1図－2 5図－2	14
12	冑塚古墳	東松山市大字下唐子字原坂口	円墳	銅地銀張製責金物・銅製鞘尻	鉄鏃・弓金具・刀子・環状鏡板付轡斜格子文心葉形杏葉・雲珠・辻金具鞍金具・飾金具・耳環・玉類・須恵器		15
13	三千塚古墳群	東松山市	古墳	金銅装頭椎大刀		2図－3	16・17
14	三千塚8－3号墳	東松山市大谷	古墳	鉄製円頭柄頭			
15	田木山1号墳	東松山市大字田木字相生	円墳	銅装大刀・鉄装大刀	鉄刀・刀子・耳環	4図－6	18
16	附川7号墳	東松山市石橋	円墳	銀象嵌装大刀	鉄刀・鉄鏃・弓金具・刀子・耳環・紡錘車・須恵器		19・20
17	西原1号墳	東松山市大字上唐子字西原	円墳	銅装方頭大刀	鉄鏃・銅鋺	4図－4	21
18	西原3号墳	東松山市大字上唐子字西原	円墳	鉄装円頭大刀	鉄鏃		21
19	かぶと塚古墳	比企郡吉見町大字久米田	円墳	金銅装圭頭大刀	須恵器	4図－2	22
20	大道古墳	比企郡滑川町大字羽尾4883-2	円墳	鉄製円頭柄頭or鞘尻	鉄鏃・耳環・玉類		23

番号	遺跡名	所在	遺構	遺物	共伴遺物	挿図番号	文献
21	大野原古墳	秩父市大野原	円墳	蕨手刀	鉄刀・鉄鏃・和同開珎	4図－8	24
22	稲荷塚古墳	秩父郡皆野町神字上ノ平678-3	古墳	銀象嵌装単鳳環頭大刀	鉄刀・刀子・須恵器	1図－3	1
23	飯玉古墳	本庄市東台・日の出	古墳	金銅装圭頭大刀装具	刀子	4図－3	25・26
24	御手長山古墳	本庄市小島	円墳	鉄製圭頭柄頭片	鉄刀・鉄鏃・弓弭・弓金物・挂甲小札飾金具・鞍金具・耳環・玉類・須恵器形象埴輪・円筒埴輪		27
25	下野堂古墳群	本庄市下野堂	古墳	鉄製鞘尻・責金物	鉄鏃・刀子		28
26	塚合41号墳	本庄市塚合2977-1	円墳	銀製責金物・鉄製鳴目・鐔・足金物・責金物・鞘尻	鉄鏃・刀子・耳環・玉類・形象埴輪円筒埴輪		29
27	坊主山古墳	本庄市小島	古墳	鉄製鐔・鞘尻	鉄鏃・玉類		28
28	秋山古墳	児玉郡児玉町大字秋山	円墳	銀象嵌円頭大刀装具	鉄鏃	3図－3 5図－4	30
29	庚申塚古墳	児玉郡児玉町大字秋山字宿田保	円墳	金銅製責金物・鉄製鞘尻2・責金物・鐔	鉄刀・鉄鏃・弓金物・刀子・雲珠・辻金具・鞍金具・耳環・玉類		31・32
30	浅間山古墳	児玉郡上里町大字神保原15-1	円墳	金銅装大刀	鉄刀・鉄鏃・鉄鉾・耳環・玉類・銅鋺須恵器		1・33
31	塚本山9号墳	児玉郡美里町大字下児玉字西村	円墳	鉄装大刀	鉄鏃・須恵器・土師器		34
32	塚本山19号墳	児玉郡美里町大字下児玉字西村	円墳	銀象嵌装頭椎大刀	鉄刀・鉄鏃・耳環・須恵器・土師器	3図－1 5図－3	34・35
33	生野山古墳群（中山古墳）	児玉郡美里町十条	円墳	金銅装頭椎大刀	不明		30
34	広木大町5号墳	児玉郡美里町	円墳	金銅装圭頭大刀装具	須恵器		36
35	神川町No.123古墳	児玉郡神川町大字新里字北塚原	円墳	金銅装大刀	鉄刀・鉄鏃・弓金具・刀子・耳環・玉類・埴輪		37
36	城戸野4号墳	児玉郡神川町大字新宿376番地他	円墳	銅製鳴目	鉄刀・鉄鏃・弓金具・耳環・玉類・須恵器		38
37	（不祥）	児玉郡内		鉄製円頭柄頭or鞘尻4・金銅製鐔・足金物・責金物		3図－5	39

番号	遺跡名	所在	遺跡	遺物	共伴遺物	挿図番号	文献
38	大塚古墳	熊谷市大塚	円墳	金銅製鞘尻	鉄鏃・挂甲小札・玉類・須恵器・金箔塗漆木棺片		39・40
39	小曾根神社付属地	熊谷市小曾根	不明	銀装大刀片・銀象嵌鐔	飾金具・耳環・玉類		1
40	広瀬古墳群（熊商校内円墳）	熊谷市広瀬	円墳	蕨手刀	なし	4図－7	41
41	万吉下原1号墳	熊谷市大字万吉字下原1827-3他	円墳	金銅製鞘尻・責金物	鉸具・刀子・耳環		42
42	三ヶ尻林4号墳	熊谷市大字三ヶ尻字林3389	円墳	銀象嵌装大刀	鉄刀・鉄鏃・弓金具・刀子・銅釧・耳環・玉類・須恵器・形象埴輪・円筒埴輪	3図－2	43
43	木の本古墳群	深谷市原郷	古墳	金銅装頭椎大刀			44
44	岡古墳	大里郡岡部町大字岡	円墳	鉄装大刀？	不明		30
45	（不祥）	大里郡岡部町本郷		頭椎柄頭			45
46	円山2号墳	大里郡大里村大字箕輪字円山	円墳	鉄製円筒柄頭or鞘尻	鉄刀・鉄鏃・刀子・須恵器・円筒埴輪		46・47
47	小原療養所構内	大里郡江南町	不祥	金銅装大刀			
48	小前田18号墳	大里郡花園町大字小前田	円墳	銅製鐔	鉄刀・鉄鏃・弓金具・刀子・耳環・玉類		48
49	小前田88号墳	大里郡花園町小前田字橋屋	円墳	銅製鳴目・鞘尻	鉄刀・耳環・玉類		49
50	鹿島1号墳	大里郡川本町大字本田	円墳	鉄装大刀・銅地銀張責金物	鉄鏃・刀子・火打鎌・須恵器（墳丘）埴輪		50
51	鹿島16号墳	大里郡川本町大字本田	円墳	鉄装大刀	鉄刀・刀子・耳環		50
52	鹿島20号墳	大里郡川本町大字本田	円墳	鉄装大刀	鉄刀・鉄鏃・刀子		50
53	蛤塚古墳	大里郡川本町字畠山1094	前方後円墳	金銅製頭椎柄頭	鉄鐔・玉類	2図－4	51
54	小見真観寺古墳	行田市荒木小見	前方後円墳	金銅装頭椎大刀2・銀装圭頭大刀	鉄鏃・衝角付冑・挂甲小札・銀装刀子・耳環・銅鋺・須恵器	2図－1 2図－2 4図－1	1・52・53・54
55	将軍山古墳	行田市埼玉	前方後円墳	金銅装変形三葉環頭大刀・銀線巻柄・銀装嵌柄元金具・捩り環頭柄頭・金銅製三輪玉・水晶製三輪玉	鉄鉾・鉄鏃・挂甲小札・横矧板鋲留衝角付冑・環状鏡板付轡・十字文心葉形鏡板付轡・棘葉形杏葉・雲珠辻金具・鞍金具・飾金具・輪鐙・馬鈴馬冑・蛇行状鉄器・鈴・耳環・玉類乳文鏡・銅鋺・石製盤・須恵器	1図－1 5図－1	1・55・56・57
56	八幡山古墳	行田市藤原町2-27-2	円墳	銅製方頭柄頭・金銅製鞘尻	鉄鏃・釘・銅鋺・須恵器・棺金具	4図－5	58

文　献

1．東京国立博物館1986　東京国立博物館図版目録　古墳遺物篇（関東Ⅲ）　便利堂
2．大宮市1968　大宮市史 第１巻
3．鴻巣市1989　鴻巣市史 資料編１　考古
4．高橋健自1910　鏡と剣と玉
5．塩野　博・増田逸朗1970　西台遺跡の発掘調査　埼玉県遺跡調査会報告第５集　埼玉県遺跡調査会
6．塩野　博 他1978　川田谷古墳群　桶川市文化財調査報告書第10集　桶川市教育委員会
7．川越市1972　川越市史 第１巻 原始古代編
8．毛呂山町1987　毛呂山町史
9．村木　功1988　毛呂山町の遺跡 ― 遺跡詳細分布調査報告書 ―　毛呂山町教育委員会
10．村木　功 他1987　松の外遺跡・西戸古墳群　毛呂山町教育委員会
11．田中広明・大谷　徹1989　東国における後・終末期古墳の基礎的研究 (1)　研究紀要 第５号　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
12．柳楽　理1988　大河原遺跡　坂戸市遺跡群発掘調査報告書第Ⅰ集　坂戸市教育委員会
13．金井塚良一 他1968　柏崎古墳群　― 埼玉県東松山市柏崎古墳群発掘調査報告 ―　考古学資料刊行会
14．穴沢咊光氏御教示
15．金井塚良一 他1964　東松山市冑塚古墳発掘調査報告　台地研究 No.14　台地研究会
16．桜井達彦1987　頭椎大刀の編年に関する一考察　比較考古学試論　雄山閣
17．埼玉県立博物館1989　特別展 古墳 ― かざり大刀の世界 ―
18．野辺徳秋 他1974　田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川　埼玉県遺跡発掘調査報告書第５集　埼玉県教育委員会
19．金井塚良一1971　附川古墳群　東松山市文化財調査報告書第８集　東松山市教育委員会
20．岩本克昌1981　出土鉄製品の保存修復処置について　研究紀要 第３号　埼玉県立歴史資料館
21．金井塚良一・渡辺久生1976　西原古墳群 ― 東松山市上唐子西原古墳群発掘調査報告書 ―　東松山市埋蔵文化財調査会
22．吉見町1978　吉見町史 上巻
23．木村俊彦 他1986　寺前古墳群 大道古墳　滑川町文化財調査報告書第３集　滑川町教育委員会
24．小林　茂1988　昭和61年度指定文化財 蕨手刀　埼玉県指定文化財調査報告書第16集　埼玉県教育委員会
25．長谷川勇・石橋桂一1985　館有資料紹介　諸井家寄贈考古資料　紀要 創刊号　本庄市立歴史民俗資料館
26．本庄市1986　本庄市史 通史編Ⅰ
27．長谷川勇1978　埼玉県本庄市御手長山古墳発掘調査報告書　本庄市教育委員会
28．本庄市1976　本庄市史 資料編
29．菅谷裕之 他1969　本庄市塚合古墳調査報告書　本庄市文化財調査報告書第８集　本庄市教育委員会
30．埼玉県1951　埼玉県史 第１巻 先史原史時代
31．小澤國平1958　児玉町庚申塚古墳発掘調査記録　児玉町教育委員会
32．大谷　徹 他1990　秋山古墳群 ― 庚申塚古墳・諏訪山古墳の調査 ―　児玉町史資料調査報告 古代 第２集　児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会
33．外尾常人1988　上里町浅間山古墳の調査　第21回遺跡発掘調査報告会発表要旨　埼玉考古学会 他
34．横川好富・増田逸朗 他1977　塚本山古墳群　埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会
35．岩本克昌1986　塚本山古墳群出土鉄製品の保存処置　研究紀要 第８号　埼玉県立歴史資料館
36．美里町1986　美里町史 通史編
37．田村　誠1989　神川町青柳古墳群 ― 神川町No.123古墳の発掘調査 ―　第22回遺跡発掘調査報告会発表要旨　埼玉考古学会 他

38. 増田逸朗 他1973　青柳古墳群発掘調査報告書　埼玉県遺跡調査会報告第19集　埼玉県遺跡調査会
39. 埼玉県立博物館1984　岩手・埼玉文化交流展　北武蔵 杖刀人とその時代
40. 寺社下博1985　熊谷市大塚古墳の第２次調査　第18回遺跡発掘調査報告会発表要旨　埼玉考古学会 他
41. 小林 茂1957　武蔵熊谷市広瀬出土の蕨手刀　古代　第24号　早稲田大学考古学会
42. 菅谷浩之・駒宮史朗 他1991　万吉下原遺跡　埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集　埼玉県教育委員会
43. 小久保徹 他1983　三ヶ尻天王・三ヶ尻林 (1)　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第23集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
44. 深谷市1969　深谷市史
45. 山口平八1950　大里郡町村文化史観　大里郡町村誌　北むさし新聞社
46. 埼玉県1982　新編埼玉県史 資料編２ 原始・古代　弥生・古墳
47. 若松良一1985　比企地方の円筒埴輪　第６回３県シンポジウム　埴輪の変遷 ― 普遍性と地域性 ―　北武蔵古代文化研究会 他
48. 瀧瀬芳之1986　小前田古墳群　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第58集　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
49. 中川成夫 他1958　埼玉県大里郡花園村の考古学的調査　立教大学文学部史学科調査報告３　史苑 第18巻第２号　立教大学史学研究室
50. 塩野　博 他1972　鹿島古墳群　埼玉県埋蔵文化財調査報告第１集　埼玉県教育委員会
51. 新井栄作1986　頭椎大刀と蛤塚他　川本町地名考　川本町文化財資料第７巻　川本町郷土を知る会
52. 大野延太郎1899　武蔵北埼玉小見の古墳　東京人類学会雑誌 第14巻第156号　東京人類学会
53. 後藤守一1936　頭椎大刀について　考古学雑誌 第26巻第８・12号　日本考古学会
54. 末永雅雄1941　日本上代の武器　弘文堂書房
55. 柴田常惠1906　武蔵北埼玉郡埼玉村将軍塚　東京人類学会雑誌 第20巻第231号　東京人類学会
56. 高木豊三郎1936　史蹟埼玉　埼玉村教育会
57. 栗原文藏1961　蛇行状鉄器出土の武蔵将軍塚古墳　埼玉研究 第５号　埼玉地域研究会
58. 小川良祐 他1980　八幡山古墳石室復原報告書　埼玉県教育委員会

研究紀要　第8号

1991

平成3年10月28日　印　刷

平成3年11月1日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　誠美堂印刷株式会社